

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：24505

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370493

研究課題名(和文)新言語形成の1類型 - 極北の言語ドルガン語をモデルとして -

研究課題名(英文)A type of language formation - on the formation of Dolgan language in the Far North of Siberia-

研究代表者

藤代 節 (Fujishiro, Setsu)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30249940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、極北のチュルク系小言語ドルガン語の形成について、20世紀初頭にトゥルハンスク地方の言語調査記録を残したK.M.ルチコフによる資料に基づき分析した。これらの資料を詳細に分析することで、形成期のドルガン語は、現代ドルガン語文語(標準語)とは少なからぬ差異を有し、その形成に関わった異系統言語との接触の痕跡をよく反映していたことが明らかになった。また、言語生態、即ち、「形成 - 発展 - 衰退 - 消滅の危機」に言語コミュニティの置かれた社会的政治的状況が及ぼす影響についても分析を進めた。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have studied how Dolgan, a small language in the Far North of Siberia, was formed and developed. Thought the process of formation of this language is not obvious, the materials compiled by K.M.Rychkov, a Russian ethnographer, are available. Rychkov visited the Turukhansk region at the beginning of 20th century and left abundant materials and documents among which there are some in and on the Dolgan language. With his collection, we have revealed that the language recorded by Rychkov, which can be assumed to be the proto-Dolgan, is quite different from the present standard Dolgan. We can conclude from this that the multilingualism in this area was strongly involved in the development of the Dolgan language. We have also observed how the language ecology of "birth, development, decline, and endangerment" is influenced by its environments social as well as political.

研究分野：シベリアの諸言語研究

キーワード：言語接触 ドルガン語 ヤクート語 言語形成 K.M.ルチコフ エベンキ語 チュルク語 シベリア

1. 研究開始当初の背景

極北のチュルク系小言語ドルガン語(現在の話者約 5000 人)の形成には、その基盤となったチュルク系言語ヤクート語の使用者の他に、ヨーロッパロシアから到着し、そのまま残ったロシア語使用者、先住のツングース系のエベンキ人、あるいはサモエド系のガナサン人等が関与した。ドルガン語は、17~18 世紀頃の極北タイムル半島で芽生え、19 世紀末から 20 世紀初め頃には、成立した。

ドルガン語は、20 世紀に入り、ロシア革命(1917 年)、ソ連邦崩壊(1991 年)等大きな社会変革を経験する。ロシア革命後、「超大言語」ロシア語の影響がシベリアにも直接的かつ大々的に及んだ。かつての「大言語」ヤクート語は、文語の整備を行い、「超大言語」が言語コミュニティを席卷するのをある程度くいとめたが、文語のなかったドルガン語は初期のソビエト政権により民族語教育の面でも強力に推進された学校教育において標準ヤクート語を文語とせざるを得ず、ヤクート語の影響を再び強く受けた。その後のスターリン体制下においてはソビエト市民育成のためにロシア語教育が重要視された。現在では若年層のみならず、母語をロシア語とするドルガン人が増えている。

ドルガン語は、話者数の少ない言語とはいえ、現在の言語状況を観察することが今なお十分に可能であり、かつ近年になってロシア国内で帝政ロシア時代の調査文献の情報が得られるようになり、その利用が可能になっている(申請時に代表者は既にこれら 20 世紀初頭の文献記録の一部を入手し分析を進めつつあった)。更に、20 世紀の大きな社会的変革を幾度か被りその影響下での言語コミュニティの変容についてもロシア人研究者及びドルガン人研究者等による諸文献で確認することができる。即ち、ドルガン語については、<新言語形成 - 発展 - 衰退・消滅あるいは更なる発展(「成熟」・新言語の形成)>という、一般には実際に観察することが困難な過程をつぶさにみることが出来る。

ロシア人研究者、リュチコフ K.M. は 20 世紀初頭 10 余年間、クラスノヤルスク地方エニセイ川及びその支流域北部を中心とする旧トゥルハンスク地方で北方ツングース(リュチコフ資料ではこの中にはドルガンも含まれている)のフォークロア収集にあたり、多くの未刊行の資料を残している。ドルガン語情報はこれまでミッデンドルフがドルガン氏族とその言語について言及した簡単な報告が 19 世紀半ばにある以降は、ソビエト時代の 1930 年代後半以降のウブリヤトワの言語調査やポポフの民話資料調査までまとまった資料はなかった。リュチコフの資料により、ウブリヤトワのドルガン語資料より凡そ 1 世代前のソビエト政権がシベリアに及ぶ以前の言語の姿をとらえることができ、これは新言語形成のメカニズムとその発展の初期の状態を確実に知らせる重要な資料でこ

の分析を通じて、言語形成の 1 類型を明確に示すものである。

2. 研究の目的

新言語の形成の 1 類型を言語内外のデータに基づき、提出することを目的とする。異系統言語の接触により新しい言語が形成される過程やその後の発展の過程をたどることは興味深い、実際のデータに基づいてそれを観察することは難しい。しかし、幸いなことに極北のチュルク系小言語ドルガン語についてはそれが可能である。本研究課題では近年、資料として使用することが可能になった 20 世紀初頭(帝政ロシア時代)のドルガン語調査資料に基づき、そこに反映されたドルガン語の形成過程を明らかにする。

また、一方、現在、言語面においてもグローバル化の潮流が今後引き起こす個々の言語への変容は具体的には予測不可能である。しかし、シベリアの小言語に 20 世紀の社会的政経的変革がもたらした影響を雛型ととらえることで、グローバル化が引き起こす言語変容の一つのあり方を予測することも可能であり、これを目的の一つとしたい。

ドルガン語については、形成過程をリュチコフの資料の分析を通して辿った後、この言語の発展をソ連邦時代あるいは連邦崩壊後のドルガン語資料や申請者による言語調査資料さらには社会体制の変換などの言語外的事実からも探り、言語の生態を分析する。この分析により新言語形成とその生態の 1 類型を提出することを目的とする。

なお、言語の生態を探るにあたり、同系の古代語であるウイグル語と当時の漢語の接触を反映する言語資料を文献から分析することも同時に進行させ、小言語であるドルガン語と大言語ロシア語との接触の類型と対照することも発展的課題としては視野に入りたい。

3. 研究の方法

本研究課題ではリュチコフによる形成期のドルガン語資料に基づきドルガン語をモデルに言語形成の 1 類型を提出するにあたり、主に以下の段階を考えた。1 ドルガン語形成期に関わった諸言語の影響の分析、2 ドルガン語がドルガン族の言語として成立した後の発展萌芽期における当該言語とその言語コミュニティの分析、3 「小言語」ドルガン語にもたらされた「大言語」ヤクート語の影響とその分析、4 民族のアイデンティティを支える言語としてのドルガン語と「超大言語」ロシア語の脅威と言語コミュニティ維持に関わる諸問題の分析を行う。さらに 5 ドルガン語をモデルとして新言語形成の契機やその背景について具体的なデータに基づき類型を提出する。最終的には、極北に限らずシベリア全域に様々に分布する言語、あるいは古代から現在に至るチュルク系諸言語の生態をあらためて見直し、言語取り替え、

ピジンのクレオール化等、これまでの言語接触の類型に新たな観察視点を提供できるか検証していきたい。

4. 研究成果

本研究課題において行ったドルガン語形成過程の分析を主に 20 世紀初頭のルチコフ資料に基づき行い、この言語の形成期に生じた具体的な言語接触の様相を明らかにすることが出来た。

また、これまであまり研究対象として取り上げられることのなかったルチコフ資料を論文の形で発表した。ルチコフ資料については、未だ公開されていないものが大半であるが、ルチコフの収集したトゥルハンスク地方の 20 世紀初頭の言語資料を公開する準備も行った。以下にやや詳しく述べる。

(1) ルチコフ資料におけるドルガン語記録の収集：ロシア科学アカデミー東洋文献研究所には、例えば、中央アジア出土の写本などを収集した写本部、出版物として刊行された書籍を収める図書部、様々な古文書を集積したアーカイブなど、いくつかの部署があるが、アーカイブの中に「東洋学者等のアーカイブ」と称する部門がある。そこに、K.M.ルチコフの遺した各種文献資料(言語調査記録、著作、カード式辞書等)が収められている。これらルチコフ資料の大半は、ツングース語(20 世紀初頭に現在のクラスノヤルスク地方北部域で話されていたエベンキ語)の言語資料であるが、1500 余語から成るドルガン語ロシア語(カード辞書)が遺されている。今回の課題では既に代表者がその写しを入手し着手していたデータ整理をさらに進めた。また、この資料に加え、シャーマニズムに関連するツングース語資料に混在していたチュルク語資料を確認することができ、その複写も入手した。

(2) ルチコフ辞書の分析：ルチコフによるカード形式のドルガン語辞書の分析を行った。未だ、全ての語彙について分析済みとは言えないが、ルチコフの記録したドルガン語は、その形成の基盤となったヤクート語とは著しく異なり、現代の標準ドルガン語の語彙とも少なからず乖離していることが明らかである。本研究においては、ルチコフ資料のドルガン語の来源が不明である語彙について検討を重ねた。また、来源は判明したものの逸脱した語彙形式が散見されるが、これらについて、その由来するところをツングース語をはじめ、周辺のサモエド系言語との関わりから分析した。それらの接触については、言語形成、すなわち、ドルガンという民族集団の形成に関わった言語話者の存在があったことが具体的に反映されているとみることができた。

(3) ルチコフ資料にみる現代標準ドルガン語からの逸脱は、ルチコフが記録した時期以降にドルガン語の置かれた状況が反映していることが、ソビエト連邦時代に出版され

た民族学分野の文献などを辿ることにより推測できる。一つには、ドルガン語は、その文語(標準語)をヤクート語でながらく代用しており、1980 年代まで文語を持たなかった経緯がある。そのため、ようやくできあがった現代ドルガン語標準語は、ヤクート語との差異が非常に小さい。

上記でも述べてきたように、ルチコフの記録したドルガン語が、現代ドルガン語からの逸脱が大きいのは、20 世紀半ば以降の言語使用事情によるものであると推察される。ルチコフのドルガン語を、形成が成立する時期のドルガン語と考えた時、ヤクート語を規範とする形での接触がなければ、ドルガン語は、今日の標準ドルガン語とは大きく異なる発展を遂げていたと思われる。形成 発展を辿ってきたドルガン語は、21 世紀に入り、著しくその話者数を減少させている。近年のロシア語との大量接触の様相を詳細に観察することを通じて、さらに衰退・消滅の危機へと続く言語生態を確認する必要がある。本研究では、その最終段階の手前までは観察を終えた段階である。

(4) ルチコフ資料の中にある直接的な言語資料以外の、婚姻あるいはそれに類した行事の際に記録されたと覚しき詩歌(唄)のテキストを見いだした。このテキストには、チュルク語、ツングース語、ロシア語の要素が明らかに混在しており、当時の当地の言語接触の様子が観察される。研究期間内に口頭発表は行ったが、近日中に解説を付して、紹介論文を発表する予定である。辞書にみる語彙資料以上に、どのように異系統言語がコミュニティで用いられていたか、を示す恰好の資料である。

(5) 上記までの成果に加え、チュルク系言語の古い接触の有様を如実に物語る資料の研究に従事し、ウイグル語古文書の分析に参加した。ウイグル文字表記された漢語音の文献研究の成果とりまとめに、共著者として参加した。

(6) 北方諸言語使用域の文化的要素について、一般向けの著作に研究成果の一端を提供し、併せて、周辺言語に関わる情報を得た。

(7) ウェブ上で研究成果の公開をすすめるためのプラットフォームとして HP を解説した。本研究課題による研究に限らず、ユーラシアの言語研究に関する成果を国内外に発信できる端緒を築くことができた。

(8) 今後の課題(近い将来的な課題)：本研究で明らかになったドルガン語形成上の特徴を、ルチコフ資料(ドルガン語-ロシア語辞書、詩歌など)の出版とともに刊行したい。特に、辞書については、E.K.ペカルスキーの『ヤクート語辞典』に収録された、約 300 語のドルガン語語彙及び現代標準ドルガン語語彙と対照した形で出版する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Сэцу Фудзисиро (Setsu Fujishiro), “Заметки о долганской лексике в долганско – русском словаре К. М. Рычкова”, *Вопросы истории и культуры северных стран и территорий*, 2014(4) 23-34、2014(査読有)

Setsu Fujishiro, “Elements of Dolgan in the early 20th century found in the Dolgan-Russian dictionary by K.M. Rychkov”, *Türk Dilleri Araştırmaları*, Vol.24(1) 115-129, 2014(査読有)

〔学会発表〕(計 4 件)

藤代節、(招待講演)「ロシア極北タイムル半島のドルガン語形成：20世紀のドルガン語の"生態"」(The formation of Dolgan language in Tajmyr, Far north in Russia:"Ecology" of Dolgan language in the 20th century、中央民族大学 中国少数民族语言文学学院 (中国、北京市) 2013.10.27

藤代節、「ドルガン語とヤクート語の「再接触」 規範と言語形成」, 2014年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2015.3.27.、京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、京都

藤代節、(客員教員セミナー)「20世紀初頭のトゥルハンスク地方のドルガン語形成事情について」, 2016年2月16日、北海道大学スラブユーラシア研究センター第4会議室、札幌

藤代節、「ツングース語調査資料に混じていたチュルク語シャーマンの唄(?)」, 2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究最新の報告」, 2016.3.26. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、京都

〔図書〕(計 2 件)

Masahiro Shōgaito, Setsu Fujishiro, Noriko Ohsaki, Mutsumi Sugahara, and Abdurishid Yakup, *The Berlin Chinese Text U 5335 Written in Uighur Script: A Reconstruction of the Inherited Uighur Pronunciation of Chinese*, (Berliner Turfantexte Berlin - Brandenburg Academy of Sciences and Humanities Turfanforschung (BTT series V.34), Brepols Publishers, Turnhout, Belgium 208p. + 7pls., 2015

藤代節、『シベリア先住民の食卓』(永山ゆかり・長崎郁編)(分担執筆)、第6章「魚のうまみだけで作る正統派のスープ

(ドルガン)」(pp.36-41)、第28章「植物あれこれ：言語に紡がれたツンドラの香り(ドルガン)」(pp.162-167)、第32章「小麦粉料理—ツンドラ地域の硬派な味(ドルガン・ヤクート)」(pp.182-186)、東海大学出版会、2016

〔その他〕

ホームページ等

<http://el.kobe-ccn.ac.jp/csel/>

Consortium for the Studies of Eurasian Languages (上記 URL 内に成果の一部を掲げた。以後も更新の予定。)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤代 節 (FUJISHIRO, Setsu)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30249940